



わが国における妊婦の栄養管理の歴史：2021年新たな妊婦の体重増加指導の目安策定までの変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本DOHaD学会 公開日: 2022-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊東, 宏晃 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003955

第 10 回日本 DOHaD 学会

<会長講演>

**わが国における妊婦の栄養管理の歴史：2021 年新たな妊婦の体重増加指導の目安策定までの
変遷**

浜松医科大学産婦人科

伊東 宏晃

今般、第 44 回日本女性栄養・代謝学会学術集会ならびに第 10 回日本 DOHaD 学会学術集会の合同開催の会長を仰せつかりました。日本女性栄養・代謝学会は妊婦の栄養摂取に介入することで母児の予後の改善を目指すことに半世紀にわたり取り組んできた学会である。その原点のひとつは、第二次世界大戦の末期にドイツ軍の経済封鎖によるオランダの饑餓、いわゆる Dutch Famine を妊婦として経験した場合に妊娠中毒症（現在の妊娠高血圧症候群に相当）の合併率が低かったという疫学研究に遡る。城戸国利博士はこの疫学研究に着目した介入研究を行い「妊娠中毒症妊婦を低カロリー摂取で管理すると主症状に改善を認める」と報告した（日産婦誌 29;1305,1977）。やがて日本産科婦人科学会から妊娠中毒症の発症予防を目的とした比較的厳しい妊婦の体重増加の指針が出された（日産婦誌 51;N-507,1999）。一方、後年になり Dutch Famine を経験した妊婦から生まれた人々は老年期に生活習慣病を発症するハイリスク群となることが発表され大きな注目を集めた。この疫学研究に加えて英国 Barker 博士の低出生体重児の長期予後の解析あるいはヘルシンキ大学の出生コホート研究の成果などから、Developmental Origins of Health and Disease (DOHaD) という新たな概念が提唱された。胎生期を含む広く発達期における栄養などの環境因子が、老年期における健康や疾患の発症リスクを形成するという学説であり、2012 年に日本 DOHaD 学会が設立された。

さらに、2018 年 Science 誌において DOHaD 学説の視点から、1999 年に公表されたわが国の妊婦への体重増加指針が児の長期的な健康に悪影響を及ぼす可能性を指摘したこと（Science 361:440, 2018）を受け、1999 年に発表された妊婦の体重増加の指針は、歴史的な役割を終えたとして、正式に撤回された（日産婦誌 71:1248, 2019）。そして、2 年間の検討を経て 2021 年 4 月日本産科婦人科学会から、新たに「妊娠中の体重増加の目安」が公表された。

本講演では、わが国における妊婦の栄養管理の歴史ならびに今後の展望を概説する。